

あがたい 縣居翁・賀茂真淵は郷土の誇り、日本の宝

ご挨拶

賀茂真淵翁遺徳顕彰会 会長 山下智之

平成最期の年に
昭和六十四年（一九八九年）一月七日に昭和天皇が崩御し、皇太子明仁親王（今上陛下）が即位しました。これを受け「平成元年一月八日」に改元しました。

平成という元号は、『史記』五帝本紀の「内平外成（内平かに外成る）」、『書経（偽古文尚書）』の「地平天成（地平かに天成る）」から「国の内外、天地とも平和が達成される」ということで、今上陛下の思いを示していました。そして平成二十八年（二〇一六年）八月八日の「天皇陛下のおことば」以降、讓位に関する議論の末に法案（天皇の退位等に関する皇室典範特例法）が成立しました。

平成は昭和の御代（六十四年）、明治の御代（四十五年）、応永の御代（三十五年）に次いで三十年一三日間（一一一、〇七〇日間）という四番目の長さとなりました。

あとわずかで、平成三十年が終わります。皆さんにとって、この平成という御代はどのような時代でしたでしょうか。

享保八年十一月二十一日

兼題二首 日沾雑餉

この日の「月次会」の参加者は杉浦国頭、日沾、紀清興、釈其阿、実栄、湛龍、源清兼、柳瀬方塾、中山吉次、成政、藤原光治、賀茂政盛、杉浦真崎、源安連、慈鏡の十五名。

それぞれが兼題の「氷初結」「寄葛恋」同日当座では自由題として三首歌いました。

「氷初結」 行河の 音もよはりて けさよりは

汀もさむく 先氷るなり

（行く河の音も小さくなって今朝からは汀も寒くなり氷ってきたことだ）

「寄葛恋」 蕙の葉の うらみかさなる 秋風に

忍ひし道も 霜かれにけり

（蕙の葉の思いがそれぞれ重なる秋風に、忍んだ道も霜が降りてきたことだ）

同日当座 見し秋の 花は色無く 枯れてて

「野霜」 冬野にむすぶ 墓の朝霧

（見ている秋の花は色が無なり枯れてしまい、冬野に結ばれた墓の朝霧が美しいことよ）

賀茂政盛（二十七歳）

十一月から名前を政盛から政盛と改めました。真淵の時代の十一月は、冬でしたので、歌も氷や霜、枯葉などが題材となりました。

賀茂真淵翁を知ろう（8） 真淵の若き頃

6歳のころ、順養子に

真淵の生前、上の姉は政盛を婿にして東岡部家を継ぎ、父政信は与三郎家を別家し、次の姉の婿政孝に継がせていた。

真淵は6歳のころ、政盛の養子になったが、そこに実子政友が生まれて帰された。

27歳 婿養子に

政長の娘婿子になる。政長は武士で詩文に秀でていた。政長の女（むすめ）16歳。二人は浜名湖を訪ね、細江や館山寺に遊び、古人の歌枕を真淵が語り、新妻は父譲りで文雅な受け答えをしたと思われる。次の真淵67歳の二首に新妻を回想した思いが込められている。

遠つあふみ 浜名のはしの 春の日に
かすめる波を むかし見しはや
故郷の 野べ見にすれば むかしわが
妹（いも）とすみれの 花咲にけり

しかし、二人の楽しい日々は僅かの間だった。結婚翌年の9月4日うら若い妻はあの世へ旅立ってしまった。17年後、真淵44歳 浜松に帰省した9月4日に墓参りし、「哀れなる事、その折ばかり覚えて、萎たれ居るに、雁の鳴きければ」と回想して詠っている。

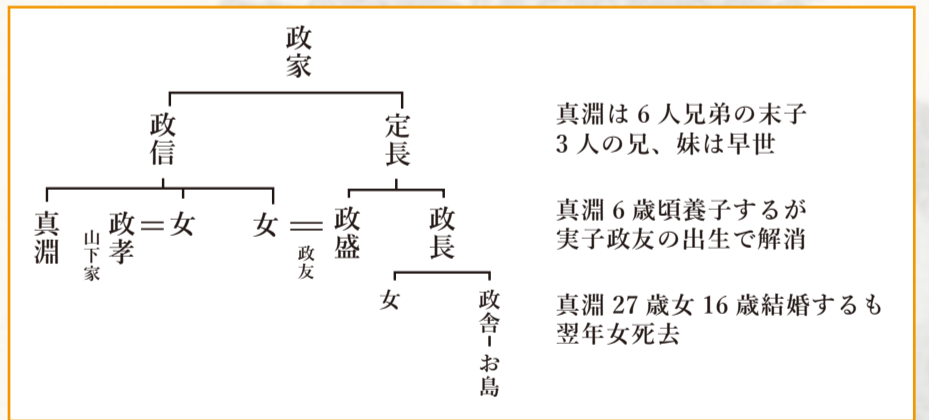
古りにける 常世（とこよ）を慕ふ 雁のみは
廻り来てこそ 鳴き渡りけれ

政長の女への思い

政長の女を失った真淵は、悲しみの余り“真言宗の僧にならむと父母に願った”という。

後年、真淵は政長の長男で“政長の女”の弟政舎（まさいえ）の女お島を養女とし、中根定雄を婿として家督を継がせた。

その後、真淵は29歳のとき梅谷家に養子に行くことになる。



活動報告

八月六日 七夕祭

縣居神社拜殿にて宮司が祝詞を奏上され、願いが叶うように祈願しました。また、賀茂真淵記念館をお借りして、昨年に引き続き桶ヶ谷沼ビクターセンター館長 細田昭博氏による講演が行われました。蝶や蜻蛉、蟋蟀の話や、竹とんぼ作りなど、子どもたちにも楽しい七夕になりました。



十月三十日 例大祭

賀茂真淵翁の命日に当たる十月三十日に縣居神社にて「例大祭」が齋行されました。真淵にゆかりのある方々が参列する中、御屏が開かれ厳かに神事が営まれました。顕彰会からは川島順三顧問をはじめ六名が参列しました。



案内看板の新設

とうろん坂の案内板を新しくしました。

多くの人に参拝していただけるよう、案内に「合格祈願」「学業成就」の言葉を入れました。

